



# 曾木の子

学校便り No.11

令和4年3月14日(月)発行  
伊佐市立 曾木小学校  
TEL:25-1152 FAX:25-1162  
伊佐市 大口曾木1753番地

ホームページ <http://www5.synapse.ne.jp/es-so/>



2011年 3月11日

校長 山田 俊也

当時、奄美大島の宇検村の学校に勤務していました。午後3時ころ、教育委員会から電話連絡があり、「ニュースを見ましたか？東北で大地震が起きて大津波警報が出ている。」と。

そのころ学校に配備されたばかりの校長室の大型テレビに映し出された映像は、衝撃的でした。沿岸を飛行するヘリコプターが捉えた押し寄せる大津波、倒壊して流されていく家屋、大きな船までもが陸地に打ち上げられ流れていく、信じがたい光景でした。

下校時刻を迎えたころ、村の防災無線放送で、大津波警報に伴う避難勧告が出され、全員、自宅には帰らずに学校前の公民館の2階に避難するように指示されました。

学校の目の前(校庭の先)は、すぐ海があり、学校の横を小さな川が流れているという場所でした。



避難した公民館には、子どもたちも、奄美市から通勤してくる職員も、地域住民も避難してきました。歩くことが困難な高齢者は、担当の消防分団員が各家庭を訪れ、2階がある家は2階に避難させ、そうでない家はできるだけ安全な部屋にいるように伝えました。

公民館の1階は小さな店があり、そこから飲み物、パン、インスタントラーメンが配られ、避難したみんなで夕食をともにしました。情報はラジオと携帯電話、開局されたばかりの地元FM、村の防災無線放送でした。分団員は時折、川や海の状況を確認し、津波と思われるわずかな海面上昇も確認したとのことでした。

帰宅許可が出たのは午後9時過ぎ、それでも分団のみなさんは公民館で待機を余儀なくされ、深夜午前0時まで帰宅できなかったそうです。



2011年3月22日 気仙沼市立階上中学校の卒業式で梶原雄太君が読んだ「答辞」

(一部省略) 自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切な物を容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というにはむご過ぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。時計の針は14時46分を指したままです。でも時は確実に流れています。

生かされた者として顔を上げ常に思いやりの心を持ち、強く正しくたくましく生きて行かなければなりません。命の重さを知るには大き過ぎる代償でした。しかし、苦境にあっても天を恨まず運命に耐え、助け合って生きていくことがこれからの私たちの使命です。



故 聖路加国際病院名誉院長 日野原重明先生

命とは、自分たちが持っている時間である。無駄遣いせずに使い切ることが使命である。